
生物兵器になって異世界に転生した元男の美少女

篠山 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生物兵器になって異世界に転生した元男の美少女

【Nコード】

N5643U

【作者名】

篠山 光

【あらすじ】

学校一の天才少年阪上 早弥。彼は第100番世界・地球でのんびり平和に暮らしていた。だが、ある日のこと。親友の神楽崎 充彦と帰宅途中、居眠り運転のダンプカーにひかれてしまう。

そして次に目を覚ましたのはそこいらに紙が散乱している研究所だった。そこは第1番世界、彼で言う異世界だった。

プロローグ（前書き）

初めて書く性転換モノです

至らないところがあったらご一報ください！！

プロローグ

ピコーン・・・ピコーン

第1番世界イルミナトス

その世界のとある大陸のとある国が所有する森の奥深くに位置する今は破棄された研究所に1人の女性が大きな試験管のようなものの中で眠っていた。否、それは人ではなく生物兵器だった。

それは、当時戦争状態にあったその国は兵士の質と量で勝る敵国に對抗すべく国中の研究者に知恵を借りて行きついたのが生物兵器の生産だ。

それを作り出すにはたくさんの試練や問題があった。

まず1つは複製クローン技術の大成である。当時の複製技術はほかの国よりは優れていたものの、人を複製するには及ばず家畜の複製クローン体生産で精一杯だった。

次にコストがかかりすぎることだ。国の国庫はあまり潤沢ではなく、むしろ日々の国の調整などで手一杯なのだ。そこに生物兵器生産のための資金も使うとなると国が潰れてしまうのは火を見るより明らかだ。

そして、最後にして最大の難関、その肉体に精神と魂の定着であった。人とは『肉体』、『精神』、『魂』の三つによって成り立っている。そのうちいずれかを欠くと一生涯覚めない植物人間と化してしまう。

人の手で『肉体』は作っても流石に『精神』と『魂』は作れないのである。精神と魂は死んでしまった人の精神と魂が自然に定着するのを待つしかない。

敵国との戦争が均衡状態に入ってはや5年、生物兵器に精神と魂が定着しなかったことから国は「生物兵器生産計画」は破棄された。

研究所が破棄されてから100年たったある日、研究所に一体だけ保存されていた生物兵器リアルX・0028CVXが覚醒し、そのことが研究所に設置されていた報告魔術にて国に伝わった。

第100番世界地球

第 100番世界というのは1に近づけば近づくほど魔法が発達して、逆に100に近づくほど科学が発達している世界になる。

だから第100番世界と第1番世界は第100番世界は科学、第1番世界は魔法しか存在しない。

この第100番世界・地球に住む天才な高校生がいた

信号待ちしていた2人の少年がいた。

「やっと学校終わったなー！サヤ！」

サヤと呼ばれた天才高校生、阪上^{さかがみ} 早弥は左手を額に当て呆れながら言い返した。

「・・・お前は学校が嫌いなのか？」

すると彼、神楽崎^{かぐらぎ} 充彦^{みつひこ}は当然だと言わんばかりに胸を張って肯定してきた。

「じゃあなんで進学したんだよ」

「うるせー、天才のサヤと違って俺は最低高卒でないと就職できないんだよー！」

「そうか。それは残念だな」

早弥はそう言い放ち、ちょうど信号が青になった横断歩道を渡ろうとした。

ちょうどその場所に居眠り運転のダンパーがものすごいスピードで早弥に向かってつっこんできた。

「っ?!」

「早弥ー!!」

そのことに気付いた時にはすでにダンプカーは目前へと迫っていた。

母さん、父さん、百合奈、ごめんな・・・

早弥は死ぬ間際に家族のことを思い出し、心の中で詫びて死んでいた。

・・・ん?ここ・・・は・・・

早弥はふわふわと漂うような感覚に背中がむず痒い感覚を覚えていた。

俺は・・・生きて、いるのか?

と、次の瞬間いきなり引つ張られたような感覚に陥り、5秒ほどたっただろうか、牽引感はなくなり眠っているような安らかな感覚に体が包まれ、早弥は疲れていたこともあったその感覚に身を委ねた。

目を覚ますと同時にピーーという音が鳴り響きその後プシューという音が流れ早弥が入っていた試験管らしきものが開き、満たされていた水とともに早弥は覚醒した。

プロローグ（後書き）

誤字脱字、感想やおススメの小説、その他批判諸々ありましたら教えてください！

第2話：覚醒（前書き）

連続投稿です

今日はたまたま時間があつたので出来ましたが次回からは亀更新になりますww

第2話：覚醒

気がつくと俺は試験管らしきものの前に立っていた。

意識が戻ると同時

人型魔術兵器No：X-0028CVX、覚醒しました
と機械音声でアナウンスが流れた。

「ん？人型魔術兵器？何のことだ？」

？！今俺の口から発せられた声はまるで女性のようにだったじゃないか！以前は他の男子のように声変わった後の高校男児のありふれた声だったのに今は女性の声のように綺麗なソプラノのように高い声？

「・・・俺は死んでいなかったのか？」

俺は自分の声について考えるのをやめ、記憶を振り返ってみることにした。

「えーっと、確か学校が終わっていつもどおりにミツと帰っていたんだっただな。そして、信号待ちしていてミツと話していてその途中で信号が青になったから渡ろうとして・・・そうだ！・・・俺、ひかれて死んだんだ。だとするとここは？死後の世界にしては現実味がありすぎるな・・・。とりあえず探ってみるか」

情報もない状態で考えても答えを導き出せないと結論を出し、まずこの部屋にある資料を読みあさることにした。

??? side・場所：王の間

先王の時代に計画していたが成果が芳しくなく破棄された「生物兵器生産計画」で研究して出来上がった唯一の兵器、X-0028C

VXが今覚醒したとの連絡が入った。

このことを受け我は速やかに研究所へいき、ここへ連れてくるよう騎士団に命令した。

「しかし、困ったのう。今は和平条約が結ばれ、平和な世の中、彼女の処遇はどうするか・・・」

王は頭をかかえて悩んでいた。

おそのことを見かねた王の近くに控えていた宰相はひとつ提案する。

「国王陛下、私にひとつ考えがあります」

王は宰相に続きを促した。

「彼女に自身の能力を説明し、制御できるようになった後、学園へ通わせてみてはいかがでしょうか？」

「彼女の身分や出身地などはどうするのだ？」

「身分については異国の貴族とでもしておいて大丈夫でしょう。出身地についてもはるか遠方より来たことにすればいいのです」

宰相の発言に王も含めたその場に居る全員が驚きを隠せなかった。いち早く立ち直った王が宰相に問う。

「王家がそのようなことをして民や他国にばれるようなことがあるのなら王威の失権にもつながるがそのところは留意しておるのであるうな？」

王は宰相に疑いの眼差しを向けた。

「もちろんです。その計画はたしか『異国』からやってきた少女をコンセプトして進められていたはずですからそれで通じます」

その宰相の一言にしぶしぶといった感じに皆下がった。

「・・・うむ、致し方ない。その案にするかの」

王の一言でこの案件についての会議は終わった。

第2話：覚醒（後書き）

・・・国王陛下の名前が出てこない、どうしよう・・・
カタカナの名前を考えるセンスがない作者でありますが頑張っ
てこれからやっつけていこうと思えますので温かい目で見守っていて
くれると嬉しいです！！

では、感想や批判、おススメの小説をお待ちしています

第3話：魔法（前書き）

サブタイトル考えるの難しいw w

サブタイトルと内容が合わないときもよくあると思いますが気にせず読んでいただけると幸いです

この回は視点がコロコロ変わります

見づらいかもしれませんが気を悪くせずお読みください

第3話：魔法

服を探すこと数時間、やっと着れる服を見つけた。

「まさか、女になつてるなんてな・・・」

先ほどの部屋までの道をトボトボと歩いていた。

ちなみに服を探していただけたのだがなぜか中に魔物が潜んでいて咄嗟に手を前にかざしたらそこから風の塊が発射され、魔物が木端微塵になったのでしばらく茫然としていると魔魔物がやってきて今度は水の刃が敵を切り裂くイメージをしたらその通りになって敵が粉々になった。またまたその光景に茫然としていると今度はリーダーらしき大きな魔物が先ほど殺した魔物とおなじ魔物十匹くらいひきつれてきたのにはっと意識を集中して一匹ずつ確実に殺していった。流石にリーダーの魔物にはてこずったが何とか両腕両足に爪で表面を軽く抉られただけの軽症ですんだ。先ほどの感覚を思い出し、この怪我に手をかざして怪我が治るイメージをすると手が光って痛みが和らいでいく。光がおさまると怪我をしていたところは何もなかったかのように綺麗なすべすべの肌がそこにあつた。このことから自分の中で俺はイメージすればどんな魔法でも使えるという仮説をたてた。

「今日はほんとに厄日だよ・・・」

部屋に辿り着き、背伸びをしてからまた資料を読みあさろうとした時、ふと何か近づいてきているような気配がした。

「なんだ？敵か？」

俺は意識を集中し、迫ってくる気配に向けて話しかけるイメージで魔力を練る。

この魔力を練るという行為も先の魔物との戦いの最中に覚えたのである。

『誰だ？』

騎士団 side

私は王の命令により、東にある森の奥深くにある研究所へと隊の皆を引き連れやって来ていた。

研究所を目視で確認したと途端、頭に少女の声が響いた。

『誰だ？』

聞き間違いかと隊の皆を見るが皆も聞こえていたようできよるきよるとあたりを見回していた。

『聞こえているのだろうか？返事くらいしてもいいのではないか？』
また聞こえたので幻聴の類ではないのだろうか。

とすれば考えられるのは研究所に居ると思われる生物兵器、X-0028CVXが何らかの方法で魔法を覚え、念話魔法を通じて語りかけてきているか、この森の主の精霊王くらいだろう。

後者はまずないだろう。この地の精霊王は比較的友好的で害を与えなければ話しかけてくることがない。となれば前者か。

「魔術師の中で念話使えるやつはいるか！」

すると、部隊の後方に居る17歳くらいの魔術師が名乗りを上げた。

「はい、私ができます」

その青年は私の隣へとやってきた。

「うむ、ではつなげ」

「はっ！」

青年は目を閉じ精神を集中させて念話魔法を起動した。

『こちらガルシア帝国国王陛下直属近衛騎士団です。あなたは培養器から出てきましたか？』

主人公 s i d e

二度目の問いかけから少し間が空いて相手から返事があった。

（培養器？・・・ああ、あの試験管みたいなやつか）

『ああ、培養器とかいうやつから出てきたが・・・それがどうした？』

『そうですか。ちなみに自分の個体番号は分かりますか？』

（個体番号・・・あれのことか？）

『X - 0028CVX、でいいのか？』

騎士団 s i d e

私はこの声の主から直接個体番号を聞いた時、れんびん憐憫の情を抱いた。

X - 0028CVXが覚醒したということは私たちの知らぬ世界で一度死を迎えているということ、一度死んだというのに体は違えどまた生きなければならぬまだ見ぬ少女の心の内を想像して同情の念が浮き出てくる

『ああ、確認が取れた。・・・まずはじめに謝らせてくれ。異世界の少女よ、我らグリーンの世界の民の身勝手に強制的に第2の生を与えてしまったてすまない。そして我らとともに我らが仕える王の住む城へ来てはくれまいか？』

できるだけの誠意をこめて少女へ問いかける。

主人公 s i d e

（異世界の少女、か・・・まあ、見た目は少女なんだが中身はれっきとした男・・・まあ、考えても詮無きことか。それより城へ来てくれだったな・・・ここにいてもいずれは食料が尽きるし丁度いい機会かな？）

『ああ、わかった。今からそっちへ行くよ』

そして、少女の波乱万丈な生活が幕を開ける。

第3話：魔法（後書き）

主人公、何気に最強WWW

ちなみに名前はまだ考えておりませんWW

でもサヤ・くてな感じにしようとは考えてます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5643u/>

生物兵器になって異世界に転生した元男の美少女

2011年7月11日19時35分発行